

七十四年前の国際文通

杉並区 田上 亮 (旧直江津・市之町出身)

手元に一冊の古い英文書翰集「Letters from American Girls」と題した本がある。

これは旧制高田高女の全生徒八〇〇名が、昭和九年(一九三四)の夏休みに、米(国)二十一日都市のハイスクール生徒と国際親書の文通をしたさいの返信の綴りである。二〇通を高女英語科代表の沼尾三郎氏が精選し、英語副読本として、翌十年(一九三五)に出版された冊子である。

戦後、私が聴いていたNHKラジオの英語講座講師の小川芳男先生があるテキスタの前書で、高田高女生徒達による米(国)ハイスクール生徒との文通について言及されたので、本書の存在を知っていた。その後、たまたま古書店で見つけ求めたものである。

長く忘れていた本書を思い出すきっかけとなつたのは、昨年年十月、岩室温泉で上越校友会総会での、新潟看護大准教授・中村博生氏による「日本人の英語学習と英語教育の現状」と題した講演である。そこで、小川先生が「英語も話せる上越人の育成」のため、工夫をこらした斬新なアイデアの下に、地元中学校で英語教育を実践され、成果をあげられこれに触れた。また、七十年以上も前に高田高女の生徒達が、国際交流の文通を行った書翰集のある事をお話しされた。その時私の手元にある一冊を思い出したのである。

小川先生は言うまでもなく英語教育の著名な学者で、平成二年(一九九〇)に亡くなられているが、実は昭和六年(一九三一)東京外語卒業早々に高田高女に赴任されている。これは全く個人の推測

だが、中学校での英語授業時間削減の動きがある中で、英語教育の一環として米(国)との国際文通を発案、指導されたのではないだろうか。

当時の日本は米(国)発の世界的な不況に襲われ、金融恐慌、工場閉鎖、農産物価格の下落など厳しい経済環境の中で軍部が台頭、満州事変の拡大、国際連盟脱退など世界で孤立化を深めていた時期でもあり、先生方は高田から生徒達の目をもつと世界に向けようとしたのではないだろうか。

日米間には昭和九年、ベープ・ルースやゲーリックら米大リーグ選抜チームの親善試合訪日や、後年太平洋戦争で日本海軍の天敵となるニミッツが東郷元帥の国葬に参列。一部排日運動もあったが、日米間で国際電話が開通するなど、第十回ロスアンゼルス五輪開催と相まって、学生間の交流はまた良好な関係が保たれていたのではないか。生徒達の手紙は両(国)の国際子女親善協会が仲介したようである。

高女生徒達の英文手紙の内容は、書翰集に載せられていないので分からないが、米(国)の返信から察するに、高田の自然、特に桜と雪が注目され、濠に囲まれた校舎、寄宿舎生活、勉強の内容、生花、

茶道、絵画、スキー、写真交換など見の回りの出来事を喜々として手紙に綴っていた様子うかがわれる。米(国)生徒達も一葉にきれいな書体で綴られた内容のある手紙を、こぞって賞賛し、どんな英語の先生に習っているのかと問い、中には娘の代りに母親が書いた手紙も見受けられた。

今やインターネット、Eメール、携帯電話など通信手段の発達には、瞬時にいつでも、どこでも情報の入手、伝達が可能な時代に発展し、今後とも一段のIT化が図られる事と思われる。

かつての異国の文化、知識の吸収や外国語の勉強、友情を育み、人と人との絆を強め、相互の信頼を深めるのに役立つた素朴な国際文通という手段は、もう死語化したのかも知れない。

文通開始七年後には太平洋戦争が勃発



この副読本も恐らく戦時中には教材として用いられることはなかったかも知れない。

七十四年前 文通に参加した高田高女の皆様は、米寿を超える年齢と思われるが、敗戦から六三年過ぎた現在、止むなく敵国になつてしまつた米国ハイスクル生徒達との文通につき、今、どんな感じをお持ちか興味のあるところである。皆様のご健勝を切に望みたい。

